

高知県 黒潮町



「砂浜美術館」のイベントのひとつ「シーサイドはだしマラソン」
長くて美しい砂浜だからこそ「はだし」で走れます。
毎年五月の連休中のTシャツアート展に合わせて開催され、大人から子供まで全国からはだしのランナーが集合。

Pick Up

発想の転換により全国が注目する町に变身 世界初“建物のない美術館”で未来へ前進

高知県黒潮町は、四国・西南部の海沿いにある温暖な町。美しい砂浜と松原のある景勝地として知られてきましたが、松原がマツクイムシにより壊滅的な被害を受けてしまいました。そこでその再生をきっかけとして“造られた”のが、建物のない美術館「砂浜美術館」です。今回は、環境そのものを生かすユニークな発想の転換で集客効果をあげ、全国から注目されている黒潮町の取り組みをご紹介します。

南国土佐・黒潮が洗う漁業と農業の町

平成十八年三月に大方町と佐賀町が合併して誕生した黒潮町。高知市から西に約百キロ、四国・西南部の太平洋岸に位置し、約百八十八平方キロの面積に、約一万四千人が暮らしています。南国特有の温暖な気候で、旧大方町ではハウス園芸や黒砂糖・葉タバコ作り、稲作などの農業が中心。一方旧佐賀町は、日本一の漁獲高を誇るカツオ船団を有し、カツオの一本釣りを中心とした漁業が盛んです。太平洋沿岸では、ニタリクジラやバンドウイルカなどが見られることから、ホエールウォッチングも観光客の人気を集めています。旧佐賀町には、四国電力株式会社の佐賀水力発電所（二万五千七百ワット）があり、地域に電気を供給しています。

また旧大方町は、白砂青松が美しい景勝地「入野松原」でも知られていました。しかし昭和の終わり頃、数万本あった樹齢数百年の松がマツクイムシによる被害で枯れていき、松原の一部は廃材やゴミの捨て場になっていたのです。当時、町はシンボルである「入野松原」の再生を中心に、人口の減少・高齢化や産業の振興対策など様々な問題に直面していました。

きっかけは入野松原の再生と「松原サミット」

平成元年七月、全国各地の松原再生をテーマとした「松原サミット」が、旧大方町で開催されることになりました。この年はちょうど町振興のための十年計画を立案する年に当たっており、また国の「ふるさと創生事業」の交付金を利用して壊滅的打撃を受けていた入野松原の再生に取

高知県

お問い合わせ先：黒潮町役場 総務課 企画振興係 TEL 0880-43-2112
NPO砂浜美術館 TEL 0880-43-4915 <http://sunabi.com>



黒潮町役場 総務課 企画振興係長 松本敏郎さん

り組んでいる最中でした。そこで町は入野松原を含め、四ツに及ぶ砂浜の活用方法を真剣に検討していました。

「松原サミットで日本中からやって来る人たちに、屋外で雄大な太平洋をアピールしたいと考えていました。そんな折り、高知市に住んでいたデザイナーの梅原さんから、砂浜を利用したTシャツアート展の提案があったのです」

現在黒潮町役場の企画振興係長である松本敏郎さんは当時を振り返ります。Tシャツアート展とは、写真をプリントした何百枚ものTシャツを、砂浜に打った多数の杭に渡したロープに洗濯物を干すように掲げる展示会。梅原さんが、東京にいた友人のカメラマンから、Tシャ

ツに写真や絵を簡単にプリントできるということを知り、思いついたアイデアでした。Tシャツへのプリントは、当時あまり知られていない技術だったのです。

松本さんを始めとする役場のスタッフと梅原さんは議論を重ね、これに砂の彫刻の展示を加えた「松原サミット」でのイベント「シーサイドギャラリー案」を企画しました。

砂浜でのTシャツアート展を町長に直談判

当時はバブルの真ただ中で、町の振興十年計画にホテルやプールなどを建設するリゾート計画も提案されていた。しかし町では「箱もの」による対策は考えず、また派手なコンサートなどその場限りのイベントにも懐疑的でした。

「一時的にお客さんを集めても、後が続かずだんだん負担になってくるのは目に見えている。継続的にできるものはないかと探していた時に、

「館長は鯨！」開館式のエピソード

平成3年4月1日(エイプリルフール!)、「砂浜美術館」の開館式が行われました。

砂浜に造られた鯨の実物大(13m)砂像の前に、町の人たちが大勢集合。スピーカーから「クイ〜ン、クイ〜ン」という鯨の鳴声が流れ、それを通訳したメッセージ「みなさんこんにちは。私が砂浜美術館の館長です…」が伝えられました。それから正装の町長や町の名士たちがテープカットを行い、拍手が沸き起こりました。式典が終わると館長(鯨)の砂像は子供たちの遊び場となり、ただの砂山に…。「館長の砂像はどこですか?」と尋ねられた職員は、「館長は大変忙しく、海に帰っていかれました」と答えたそうです。

砂浜美術館の主なイベント

●Tシャツアート展
毎年五月上旬に五〜六日間の会期で開催。現在は、全国から応募された千枚を超える作品が、海と空を背景にひらひらと踊り、その景色は壮観です。



●ホエールウォッチング
体長十〜十四メートルのニタリクジラや、イルカたちに出会える約四時間のツアー。地元の漁師たちが漁船で案内する。



●潮風のキルト展
らっきょうの花が咲く十一月に開催される、パッチワークキルトのコンテスト。小春日和の松原で、潮風にカラフルな作品がそよぐ。



美しい砂浜が美術館 視点を変えろと 新しいドラマが生まれる

「砂浜美術館」構想の誕生

松原サミットが終了し、その反省を踏まえながら今後町が取り組む活動の土台となる考え方が協議されました。そして誕生したのが「砂浜美術館」構想でした。

「私たちの町には美術館がありません。美しい砂浜が美

フの多くも、このイベントのメインは砂像だと思っていたようです」と松本さん。この頃は、あたりまえの自然を「資源」とする考え方について、「形」はあっても、「伝える」までには至っていませんでした。

美術館です」と現在も砂浜美術館のパンフレットなどに記載されているこのメッセージや

「砂浜美術館」というネーミングを考案したのは、デザイナーの梅原真さんです。梅原さんは高知県出身で、パッケージデザインの仕事をメインに活動中。現在では高知県文化環境部が発行しているフリーペーパー「とさのかぜ」の編集長を務め、地元の魅力を紹介しています。

「建物のない美術館は、箱もの」が全盛だったバブル時代への皮肉。見方を変えることから生

Tシャツアート展はピンときました。しかし一見、洗濯物を干して周りで砂遊びをするような企画に、町長が予算を付けてくれるだろうかと不安でした」と松本さん。案の定、この企画を当時の坂本町長に直談判して説明しましたが、返事がありませんでした。「説得が行き詰まった時、役場のスタッフの一人が、Tシャツと砂の彫刻だけじゃなく、沖を泳いでいる鯨も、松原も作品と考えたらええと思う」と言い出したのです。それを聞いた梅原さんが大きく手を打って「できた!」と叫びました。ありのままの自然を「資源」とする考え方が形を表現した瞬間でした」と松本さんは感慨深げに話します。

松原サミットで「第一回Tシャツアート展」開催

その後、それぞれのイメージが具体性を帯びた発言となり、最後に町長は「何もしなければ何も変わらない、失敗してもいいからとにかくやってみろ」と決意を下したのでした。

「Tシャツは、梅原さんの友人カメラマンの作品二百枚。また同時に高さ四メートルの砂の彫刻(西洋の城)も展

まれる皮肉は、えてして本質を見せてくれるもの。商品の本質を一目で伝えるのがパッケージデザインの仕事ですが、自然そのものが美術館であるという考え方をストレートに表現したのが砂浜美術館という名前なのです」と梅原さん。美しい松原、沖に見える鯨、砂浜に咲くらっきょう、卵を産みにくるウミガメ、浜に流れ着く漂流物、裸足で走り回る子供たち…それらすべてが「砂浜美術館」の作品。BGMは波の音、照明は太陽と月の光、作品は二十四時間、三百六十五日展示されます。

ルウォッチングなどが開催されています。百枚以上のTシャツが大波で流された。Tシャツアート展はその後も毎年開催を続け、「砂浜美術館」のシンボリックなイベントとなっていました。第二回からは作品の公募を開始。応募作品に町の小学校の作品、町の歴史写真などを合わせて千枚の展示が実現しました。また集められた作品の審査を行い、優秀な作品に賞が与えられるようになりました。第三回目からは写真の部と絵画の部が設けられ、応募数も来場者数も年々増加して全国的に知られるようになってきました。順風満帆のように見えたTシャツアート展ですが、その中には様々な困難もありました。町役場の松本さんは語ります。

「第四回の時は、大変な事態が発生しました。時ならぬ台風の影響を受け、波で展示していたTシャツが百

枚あまり流されてしまったのです。大波の中をスタッフが命がけて回収しましたが、結局数十枚は見つかりませんでした。第八回では会期二日目に暴風雨に見舞われ、会期を四日も残して中止を決定したのです。ところが翌日は嘘のような晴天で、お客さんたちから怒濤のような抗議を受けました。

その他にも様々なアクシデントがあったそうですが、その最大の危機は十年目にやってきました。

十年目に存続の大ピンチが訪れる

第十回のTシャツアート展が終了した後、町議会で、砂浜美術館は自然を乱しているという声が上がりました。Tシャツアート展などの準備のため、砂浜に重機や四輪駆



NPO砂浜美術館 事務局長 村上 健太郎さん

「最近イベントに対する風当たりが強いです。多大な予算とエネルギーを消費する割には効果が少ないか

動車を取り入れていたからです。確かにこれは、自然との付き合い方を考える」という砂浜美術館のテーマと矛盾しています。とはいえ、人力だけでイベントの準備をするのは困難でした。

「Tシャツアート展は、もともと町の振興十年計画がきっかけで始めたので、私自身も十年を区切りに、T

「Tシャツアート展は、もともと町の振興十年計画がきっかけで始めたので、私自身も十年を区切りに、T

さんは、その後も活動を続ける決心をしました。そして五年後の平成十五年には、砂浜美術館を管理・運営する事務局として「NPO 砂浜美術館」が誕生。これを町役場が援助するという体制が整いました。

イベント運営に全国からボランティアを募集

第十回のTシャツアート展からは、有名な写真家やイラストレーターなどを審査員に招くなど、イベントは盛り上がっていました。それと同時に、「砂美人連」やスタッフの負担も大きくなっていったのです。そこで第十三回から、活動を助けるボランティアの募集を開始しました。

「ボランティアの人たちは、町の民宿（廃校を宿泊施設に改築した施設）に十日間くらい宿泊しながら活動をするのですが、この間、町の人たちとの様々なふれあいが生まれます。とくに地元の料理を作るなどいろいろ世話をしてくれる民宿の人と仲良しになり、帰る時に泣いている人もいますよ」。

PRの大きなパワーになったTシャツアート展

「砂浜美術館」をPRす

る上で、Tシャツアート展は大きな情報発信源となりました。まず作品の公募告知があり、会期中はたくさんの方のマスコミが取材に訪れ、さらに審査結果発表としてそのつど情報発信ができたのです。

町の合併を機に新しい展開をいかに経済効果を高めるかも課題

旧佐賀町の「カツオ文化」とのコラボも

昨年、大方町と佐賀町が合併して黒潮町となりましたが、これを機に新しい活動の展開も協議されています。合併前は旧佐賀町役場に勤務し、現在は黒潮町の企画振興係で働く岡崎ひとみさんはこう話します。

「今まで大方町としての取り組みだった砂浜美術館ですが、これからは佐賀町が持っている（資源）も活用して何



黒潮町役場 総務課 企画振興係 岡崎 ひとみさん

かできないかと思っています。たとえばカツオの一本釣りです。そのひとつ。大漁で賑わう港や素朴でおいしいカツオ料理、半年もの間、遠洋に出る漁師生活の知恵などにもヒントはたくさんあります」。

産業振興や過疎対策にもっと活用したい

黒潮町では現在、今後十年間の振興計画を作成中。産業振興や過疎高齢化対策がその重要な課題となっています。また地元の住民からは、もっと経済効果を高めてほしいという声が上がっています。

そこで町では、特産品であるハウス園芸のキュウリの販売強化や黒砂糖を使った特産品の開発などを検討しています。また町への移住促進にも力を注いでおり、インターネッ

漂流物びつくり物語

これまで浜辺に流れ着いたものはゴミしか見られませんでした。それが「作品」としての漂流物。ヤシの実や流木から鯨の骨、英語・韓国語・中国語などの文字が書かれた瓶類、潜水具、さらに指輪まで実に「作品」はいろいろ。中でも町役場の松本さんが拾ったのは一本の瓶で、中には九か国語で書かれた手紙が入っていました。これはアメリカのブライアン君が、海流の調査のために流した千六百六個のうちの一つだったのです。松本さんは拾ったからすぐに返事を書きましたが、流した当時十一歳だったブライアン君はすでに十六歳になっていたそうです。



電気のふるさと紀行

南国土佐の中心地といえは高知市。その中央には慶長八年（一六〇三年）に山内一豊が築いた高知城がそびえ、市街を見下ろしています。高知駅から南にバスで三十分ほど行くと、月の名所として知られる桂浜に到着です。そこには明治維新の英雄・坂本龍馬の像が、遙か太平洋の彼方を見つめて立っています。不可能といわれた薩摩と長州の同盟を成功させ、海外との貿易による日本の発展を夢見た龍馬。常識にとらわれない自由な発想力。柔軟でありながら、こうと決めたら頑固なまでにやり抜く実行力。「砂浜美術館」を立ち上げ、真剣に取り組む人たちの姿に、そんな土佐人気質を感じるような思いがしました。

